山岡荘八

織田信長（四）

天下布武の巻

講談社文庫

織田信長(四) 天下布武の巻
山岡荘八
昭和50年9月15日第1刷発行
昭和53年3月25日第9刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京　8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国オフセット株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社国宝社

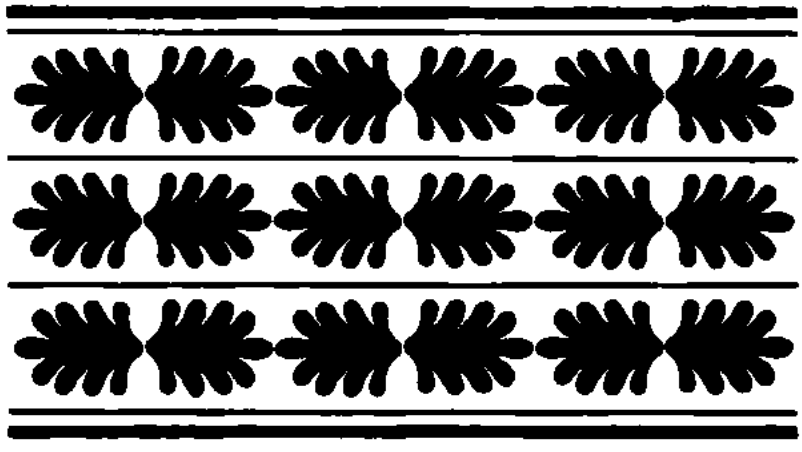
© Sohachi Yamaoka 1975
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

社文庫

織田信長(四) 天下布武の巻

山岡荘八



講談社

織田信長 (四)

天下布武の巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

後を追うもの

北国の春の陽射しは強烈だった。

短い時間に一気に万物を育ててしまおうと云う、自然の配慮かも知れない。戦っては前進し、前進しては戦いながら、敦賀から金ケ崎城をおとし、更に手筒山城をぬいて鉢伏山の東南にある木の芽峠の下までやって来たときには兜の前立までが熱くやけていた。

ここまでは予定の通り織田徳川の連合勢は全戦全勝、文字どおり破竹の勢いですすんで来た。そして今日はこの峠の麓へ本陣を移して、いよいよ明二十八日から一挙に朝倉氏の本拠一乗ケ谷への前進路へ出ようというのであった。

「どうじゃ光秀、この峠の先は道がよいか」

馬に飼料をやるように命じておいて、汗を拭きながら幔幕の中に入って来ると、信長は上機嫌で先導をつとめて来た光秀に声をかけた。

「はい。この峠を越せばもはや道は一筋、ずっと前進は楽になりましょう」

「金ケ崎城の朝倉景恒も大したことはなかったの。難攻不落が一日もかからなかったぞ」
「まことに、神速果敢、今ごろは、義景も狼狽てきって居ることでございましょう」
「この分だと、一乗ケ谷を陥れるのは、あと両三日のうちか」
「と、申しましても敵もさるもの。これは、あまりお急ぎなさらぬ方が宜しゅうございましょう」
「ハッハッハ……あまり他愛なく落ちたのでは、そなたの面目にもかかわろう。何しろ朝倉はそなたにとって以前の主家だからの」
云いながら森三左衛門の伜の長可が差出す青竹の筒から水を注いで貰いながら、
「さて、もうそろそろ落したあとの手配りも考えておかねばならぬが」
と、床几にかけた。
みんなに、ここで炊さんを許して、今日はこのあたりに野営し一息いれようと云うのである。
麾下の諸将も徳川勢も東西に並んで日一日と濃さを増す青葉の中へ幔幕を張っている。
「どうじゃ光秀、わしのそばに居るのは窮屈か」
「いいえ、何でそのようなことがございましょう。松永久秀ならばとにかく……」
「ハッハッハ……久秀は、しかし、こんどはよく働いたぞ。連れて来られた意味を悟っていると見えてな」
「はい。こんどのお供は皮肉でございました」
「あやつを京へ残して来ると、何を仕出かすかわからぬからの」
「もはや、そのような事もございますまいが、やはりご用心に越したことはないようでございま

する」
「光秀」
「はいッ！」
「わしが昨日からそちを身近におくわけが分るか」
さり気なく問いかけられて、光秀はギクリとしたように顔いろを変えた。
「すると、この光秀も、以前にこの地に仕えた身ゆえ、ご警戒なさると仰せられるのでございまするか」
「ワッハッハ……ハゲの思案はそのようなところへ落ちるか、なるほど、そう云われるとそちも、眼を離してはならぬ危い男かも知れぬのう」
「ご冗談を仰せられると……光秀、お怨みに存じまする」
「ハッハッハ、そんな不景気な面をするな光秀。わしはな、こなたが、どれだけこの地の人情地理にくわしいか、それをじっと見て来たのじゃ」
「と、仰せられまするは……？」
「知れたこと。この越前の地を手に入れたら、早速誰かに治めさせねばならぬであろうが」
「あ、それならば……」
光秀はパッと表情を明るくして、
「それならばこのたびのお先手、武功抜群の柴田どのが適任かと心得まする」
「なに、権六がよいと……」
「はい。この地は、よほど剛毅な気性のお方でないと……」

「そうは思わぬぞ光秀」
「というと、殿のお考えは？」
「ハハ……、光秀、こなた、なんでこの光秀が治めて見せると云わぬのじゃ。信長の心はもう決って居る。が、一乗ケ谷の城では治めにくかろう。こなたならばどこへ新城を築いてゆくぞ」
「はいッ。それがしならば、北ノ庄（福井）に居るのが、いちばん好都合かと」
「そうか。それではその気でな、よく民心を心にとめておくがよい。ところで、それぞれ陣割が決ったら、こなたと三左とで大将どもを呼び集めよ。まず評定を終ってから、飯にしようぞ」
「かしこまりました」
沈着冷徹に見えながら、感情だけは子供のように顔にあらわれる光秀だった。光秀は信長が越前を自分に治めさせる気と知って、勇んで幔幕を出ていった。
と、すぐにまた引返して来て、
「お館さま、うしろから、われ等を追いかけるようにして早馬が到着致してござりまする」
「なに早馬!?」
「はいッ。ああ森三左どの、こちらへ案内して来るようで。あ、あの背にした小旗の紋所は浅井家のお使番……」
一瞬信長は全身を硬直させて起ち上った。
（浅井家からの使者……）
打明けては立場上困るであろうと察して、ひそかに隠しぬいて来た義弟の浅井長政からの……
それだけで、信長の胸裏をいなずまのように脅かすものがあった。

むろん信長に浅井家の家中の空気のわからぬ筈はない。しかし、そうした空気もやがて長政によって覆されるであろうと信じていた。長政には充分に時勢を察してゆく明敏さと、信長の大志を理解する力がある……そう信じてわざと隠して出て来たのだが……

（それが後追いかけて使者を……）

と、なると、援軍を出そうと云って来る筈は万々なかった。事によると、両者の間へ調停に立とう、任せて呉れと云って来たのではあるまいか……？

それはしかし信長にとっては大変迷惑なことだった。

すでに朝倉義景を信長は見限っている。せいぜい将軍のうしろにあって騒ぎの種を煽り出す程度の人物で、しかもそれが名門であるだけに始末の悪い存在だった。彼があやしく策動すると、将軍ばかりか叡山の僧徒や本願寺の信徒までが騒ぎ出す。いや、騒ぎ出させる力を持っていると気付くと、武田信玄も、上杉謙信も、或いは彼を利用しようとして働きかけてくるかも知れないのだ。

（困った者が現われたぞ……）

ぐっと一文字に唇を引き結ぶと、持ち前の癇筋が大きく額にうねっていた。

決　裂

「小谷城より、浅井備前守の使者として小野木土佐がまかり越しました。織田どのにお取次を」

その声の終らぬうちに、森三左衛門可成が、幔幕のうちへあたふたと入って来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「小谷城より、浅井備前さまご使者……」
「通せ！　信長には耳があるわ」
「はッ！」
三左衛門が出てゆくと、信長は、その場に凝然としている光秀をかえりみて、
「進撃中止。諸将をすぐに。それから久秀狸をよく見張れッ」
と叩きつけるように命じた。
最悪の場合を考えたのであろう。これが若し調停に立とうというのではなくて、同盟の破棄であったら、遠征軍はここで完全に腹背に敵を受けることになる。
光秀にもそれはすぐに通じたものと見え、風のように幔幕を出て行って、入れ違いに浅井家の重臣小野木土佐が、森三左衛門に導かれて入って来た。
信長はとつぜんわれるような声で笑いだした。入って来た小野木土佐の顔いろを見た瞬間に、その口上が何であるかがわかったのだ。
（最悪の事態になった！）
入って来た小野木土佐が、額からえり筋へべっとりと汗をふかせたまま、唇も頬も土気いろであった。
眼はあやしく据っていたし、刀の柄においた拳はわなわなと震えていた。
「小野木土佐と申したな」
「仰せの通り」
「用件は申すに及ばぬ。誓書を返しに来たのであろう。出せッ」

信長が浴びせるように云い放ってガチャリと鐺を大地へ立てると、
「まず口上！」
相手も又はね返すように応じた。
「岐阜のお館には、浅井、朝倉、織田三家の同盟の誓書をふみにじられ、朝倉家を攻められる。これ義をもって、最も重しとするわれ等が主人の、断じて承服罷りならぬところ、依って浅井、織田の両家の交わりはこれまで、誓書返却の上、改めて織田勢に一矢おむくい申すと、これが口上にござりまする」
信長はもう一度声をあげて笑った。
「震えるな土佐。信長はそなたを斬るほど逆上はして居らぬわ。使者の口上確にわかった。立帰って備州に申せ。うぬの義は、井の中の蛙の義じゃと。蛙には、ついに信長の心は見えなんだ。哀れな奴め……と、そう申せ」
「では、たしかに誓書お返し申しまする」
「念の入ったことじゃ。いずれ戦場で会おうぞ。誰ぞある。使者に湯づけを振舞うて、味方の陣列を離れるまで送って取らせ」
相手が昂然と胸をそらし、震えを押えて去ってゆくのを見送って、信長は思わず拳に額をのせて眼をつむった。
言葉ではいくらも強く応酬出来たが、これほど大きな衝撃をうけた事は曾つてなかった。
（しまった！）
お市の良人……義弟と思うて、信ずべからざるものを信じてしまった。

いや、これとても決して長政の意志ではあるまい。が、その長政の意志が通らぬほどに険しい浅井家の空気と頑なさを見誤っていたのは何というかつさであったろうか……？

ここで浅井勢に背後から襲いかかられ、浅井の蹶起を知って奮い立った朝倉勢に行手をさえぎられたら、いったい地の理に暗い味方はどうなってゆくであろう？

あらゆる戦場であらゆる場合を経験して来ているだけに、この他国での戦の困難さは分りすぎるほどにわかっていた。一度乱戦になったら、信長自身も、家康も、部下の将兵たちもみな東西もわからぬ山岳地帯の迷子ではなかったか。

三十七歳にして、信長は、ついに九仞の功を一簣に欠き、越前の地に、その屍をさらして笑われなければならない運命を掴みとってしまったのだろうか……

不意に幔幕の外がさわがしくなって来た。

光秀の呼びにいった部将たちが、これもそれぞれびっくりして集って来たのに違いない。

信長は顔をあげた。

（ここで弱味を見せてはならぬ……）

そう思いながらも、自分の頬が、すぐさっき送り出した浅井家の使者のように、土気いろに硬ばっているのがわかって堪らなかった。

死か生か？

人間の生涯には、いかに逞しく生きぬく者の上にも何度かは、かならず生も死も期しがたい大

危機はあるものらしかった。
信長にとって、こんどの危機は、恐らく田楽狭間以来のことであろう。
出撃に際して、あれほど綿密に計画して来たことが、ただ一点の不注意からものの見事に崩れ去った。
その意味では全く、涙も出ない思いの信長だった。
(やはりわしは、人情におぼれていたのだろうか……?)
自分の可愛い妹を嫁がせているだけに、相手も自分を裏切るようなことはあるまいとどこかで甘く見ていたのだ。
(長政を怨むことはない)
このような甘さで、どうして天下を治め得ようぞ。治め得ない器ゆえ、ここで大きく運命に自決をせまられたのであろう。
「お館さま、みなみな揃いましてござりまするが……」
光秀に云われて信長は、無言でみんなの顔を見廻した。
左に柴田、佐久間、森、丹羽、佐々(さささ)と居流れ、右に徳川家康と松永久秀……少しはなれて秀吉が小さな体で片膝ついている。
どの顔も、いまは蒼じろく硬ばって信長の方から声をかけなければ、進んで物云う様子もなかった。
「ハハハハハハ」
しばらくして信長は笑った。

これはもはや、以前のような強がりではなくて、自分のおかれた立場を突きはなして眺め得た客観のおかしさからだった。

「全くもっておかしなものよ。浅井備前に手を噛まれようとはのう」

「……」

「わしは備前を、生まじめな若者、われらの志のわかる若者と思うて、始めから念をおさなんだ。少しでも怪しい節があると思うたら手も足も出ぬようにして来る手だては幾らもあった。が、それを怠って、みなに難儀をかけそうな仕儀になったわ。許して呉れ」

信長としては、恐らく稀有の言葉であったが、その頃から頬へも唇へも次第にいつもの血色が戻って来た。

狼狽だけでは事は済まない。とにかくここでは向後の動きを決断せねばならぬのだ。

「よいか。みなみなにはみなみなの考えがあろう。それゆえ信長は、ここでわれ等と行動を共にせよとは云わぬ。みなは思うままにせよ」

「して、御大将は、何となさるので」

と、あとから入って来た前田利家だった。

「信長がすることは知れてある。退路はすでに浅井の精鋭がふさぐであろう。退いて首を渡すなどはもっての他。このまま一気に一乗ケ谷へ押し寄せて、朝倉義景めと刺し違えて果てるのじゃ」

「ふーむ。それならば、むろんわれ等はそのお供じゃ。なあ右衛門」

柴田勝家が重く云うと、

「知れてあること！」

と、佐久間も一膝のり出した。
「挟まれたとわかって退くほど腰ぬけではないわ。佐々も、丹羽も、前田もおなじであろう」
「おう……」
「死ぬ時はご一緒じゃ」
しかしそれにすぐさま同意しないものも多かった。
松永久秀は当然のことながら、光秀も、秀吉も、森三左衛門も黙っている。
信長はそれを見落す筈はなかったが、敢て責めようとはしなかった。
もう一度双頬に心の決った不敵な笑いをほの見せて、
「では、早速ここで二隊に分けよう。一隊はなるべく家康どのと力を協せて出来るだけ敵を避け、何とか美濃路まで引きあげるように計らえ。わしはすぐさま前進する」
すると、それまで、端然としてみんなの表情を見やっていた家康が、はじめて床几を前へ引いた。
「しばらく……」
「三河の親類に、われ等と違う意見がござるか」
「ござりまする」
「遠慮のう、申述べられよ。こなたに済まぬ成行きじゃ」
「いや勝敗は兵家のつね。何もおどろくことはない。が、この場は織田どのも、ひとまず兵を引かれるが宜しかろうと存ずる」
「すると、あの浅井備前が兵を伏せて待ち構えるところへ退けと申されるか」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com